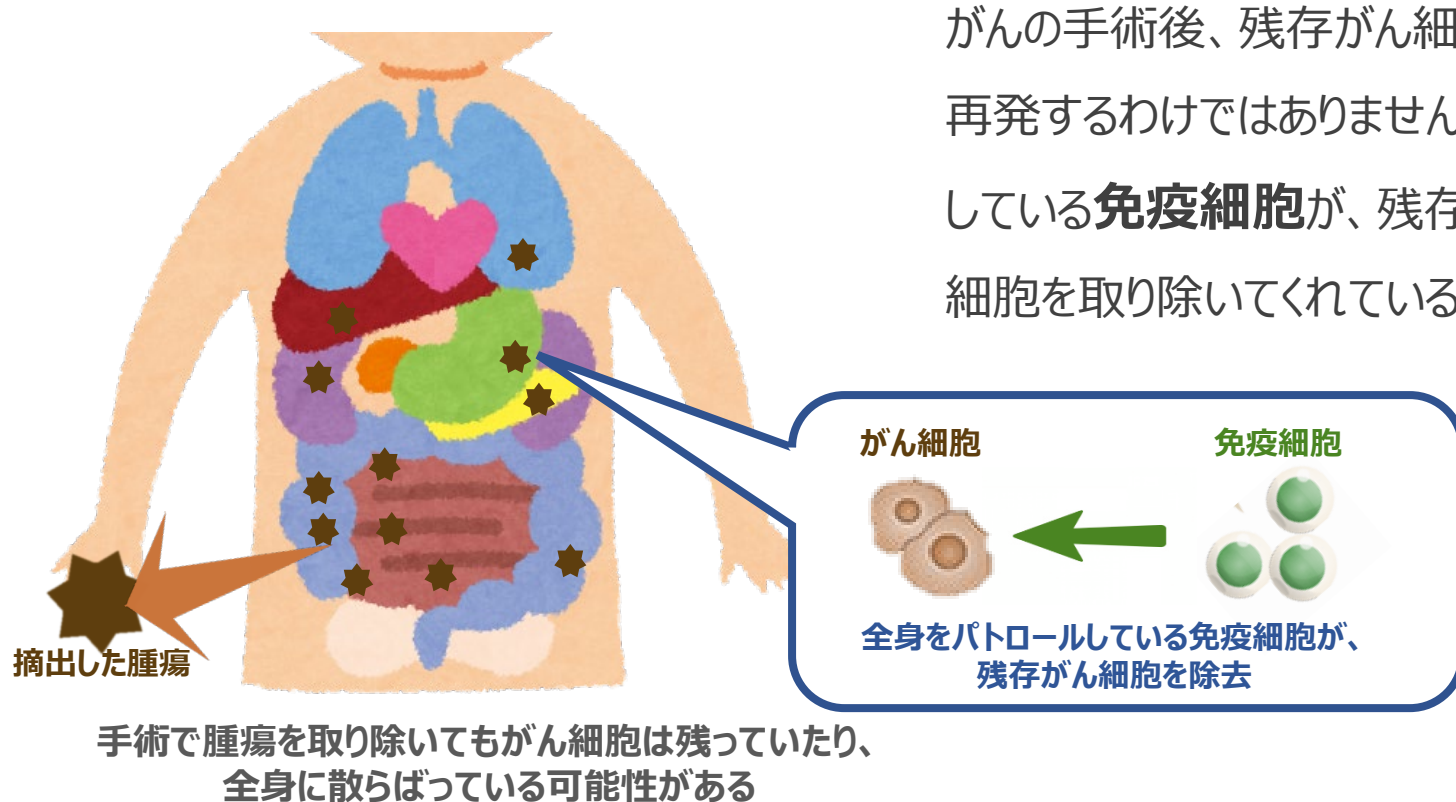


再発予防としての免疫細胞治療

がんは手術などによって一見すべて取り除けたように見えても、がん細胞は完全には取り除けておらず、検査では確認できないほど微小ながん細胞が体内に残ってしまうことがあります。この「残存がん細胞」が時間をかけて増殖し、再び腫瘍というかたちで現れてくるのが「**がんの再発**」です。

がんは一度再発してしまうとその後の治療法が限られ、予後が良くないため、**再発させないことが重要**と言われます。がんの種類やステージにもよりますが、がんの再発を防ぐためには、一般的に手術後に化学療法などが実施されます。しかし、この化学療法のみで再発を十分に防ぐことは難しいと言われています※。

※例えば、すい臓がんの手術後、抗がん剤を行った場合の5年生存率は約10~30%と言われています。

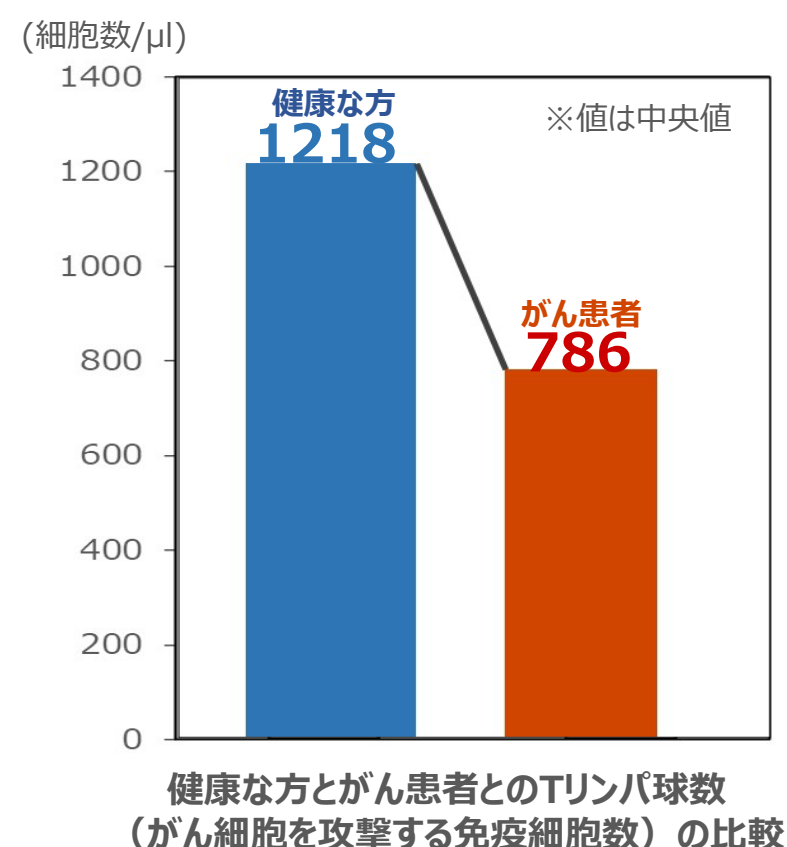


がんの手術後、残存がん細胞のすべてが増殖して腫瘍となり、再発するわけではありません。それは、私たちの全身をパトロールしている**免疫細胞**が、残存がん細胞や新たに発生するがん細胞を取り除いてくれているからと考えられています。

ところが、患者さんの免疫の力が弱まっていると、免疫細胞は残存がん細胞をすべて取り除けず、その結果として再発のリスクも高まってしまうことが考えられます。

当院が行った研究では、健康な方と比較すると、がん患者さんの免疫力（免疫細胞数）は有意に低下していることを確認しています。

※当院では、免疫力を測定する検査を実施いただけます



再発予防としての免疫細胞治療は、患者さんの免疫力を強化し、手術後に残ったがん細胞を取り除くこと、または増殖を抑えることを期待して実施いただきます。

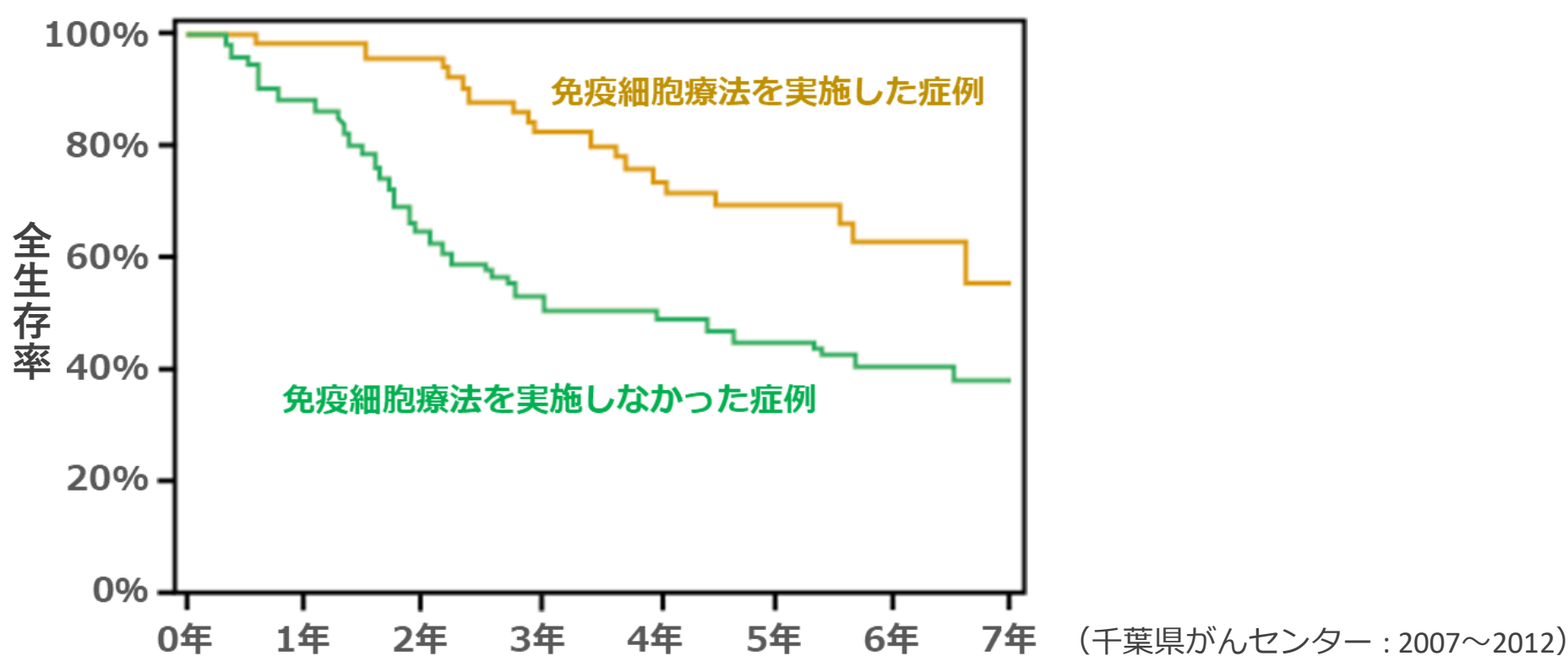
再発予防としての免疫細胞治療の効果・成績①

千葉県がんセンターにおいて、肺がん患者さんの手術後に化学療法または放射線療法と併用して免疫細胞治療をした場合の予後を確認した試験の成績が、下記のとおり報告されています。

- 免疫細胞治療を併用したグループの予後（2年、5年、7年生存率）は、免疫細胞治療を併用しないグループと比較して、有意に生存率が延びたことが確認されました。

Cancer Immunology, Immunotherapy誌 67巻8号 1231-1238ページ,2018年

肺がん患者さんの手術後の生存率の比較



再発予防としての免疫細胞治療の効果・成績②

国立がんセンターにおいて、150名の肝臓がん患者さんを2つのグループに分けて、一方のグループは免疫細胞治療を実施し、もう一方のグループは経過観察（治療は実施しない）として、それぞれの予後を確認した試験の成績が、2000年に世界的に権威のある医学誌Lancet誌に掲載され、下記のとおり報告されています。

- 5年後に再発しない割合は、免疫細胞治療を実施したグループが41%に対して、経過観察したグループが23%となり、免疫細胞治療を実施することで、有意に再発が予防出来ることが確認されました。
- 再発した方の再発期間中央値は、免疫細胞治療を実施したグループが手術後2.8年に対して、経過観察したグループが1.6年となり、免疫細胞治療を実施することで、再発までの期間を延長することが確認されました。

Lancet誌 356巻 802-807ページ,2000年

毎月開催

瀬田クリニック開催 オンラインがん免疫細胞治療説明会
(参加無料/がん患者さんとそのご家族様 限定毎月10組)

瀬田クリニック東京では全国どなたでもご参加が可能なオンラインでの治療説明会を毎月開催しています。

説明会の詳細およびお申込みは瀬田クリニックHPをご覧ください。

<https://www.j-immunother.com/seminar>

⇒セミナー詳細ページのQRコードはこちら





66歳 男性

直腸がんの両側肺転移に免疫細胞治療単独で実施し、長期間再発を抑えられた例

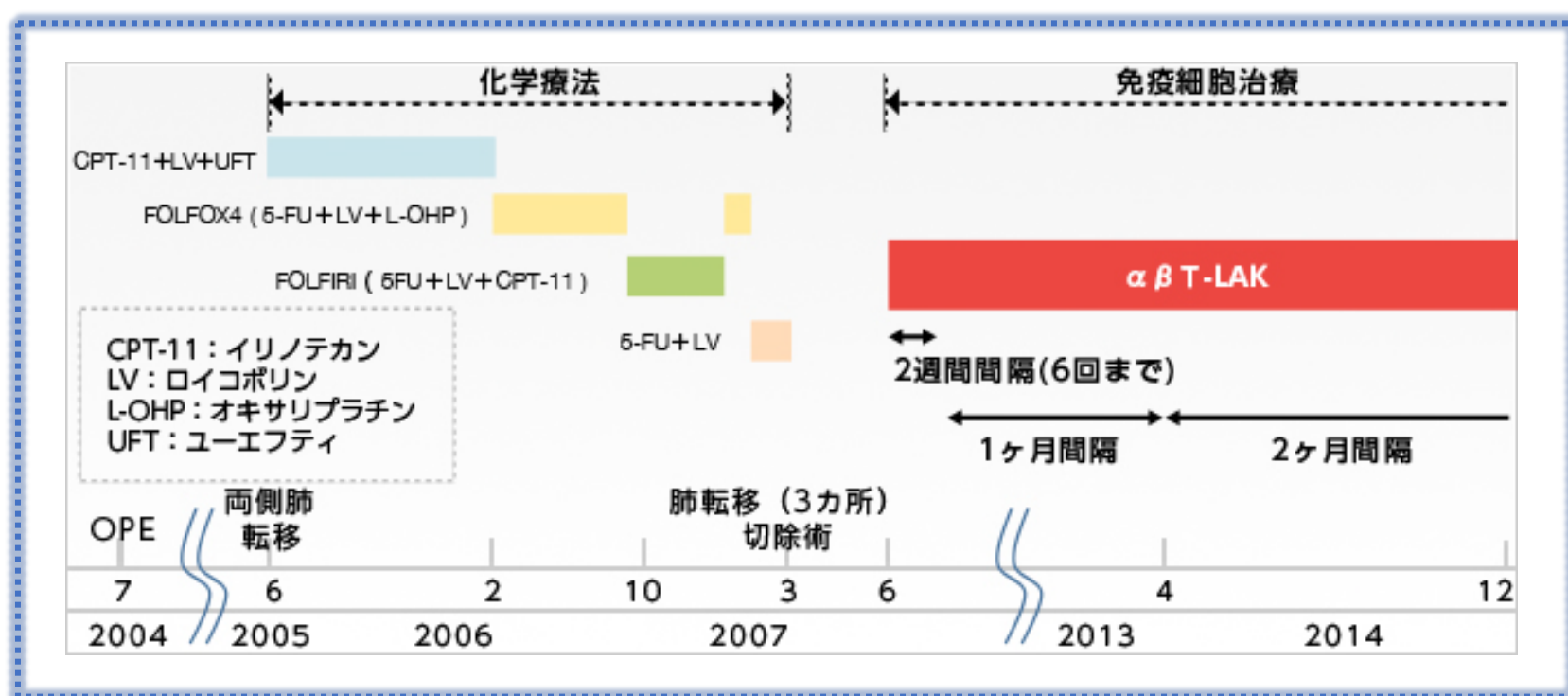
治療経緯

2004年6月、肛門に違和感があり検査を受けたところ直腸がんと診断され、翌月に直腸切除術を施行。その後、経過観察を行っていましたが、2005年6月に両側肺転移が認められたため化学療法を開始しました。様々な化学療法が施行され、唯一、FOLFOX4で腫瘍縮小の効果が見られましたが、副作用が強く使えなくなりました。それ以外の化学療法では腫瘍の増大傾向を示すなど、利用可能な化学療法が限定されました。

両側肺転移に対する肺切除は、再発する可能性が高いと予想されましたが、患者さんご本人が切望したため、2007年3月27日に肺転移切除術を施行しました。同年6月、患者さんご本人の希望により、再発予防目的で免疫細胞治療を行うために当院を受診。

治療内容と経過

2007年6月より、アルファ・ベータT細胞療法を単独で開始しました。初めの6回目までは2週間間隔で投与し、その後は1ヶ月間隔に延ばし、さらに2013年4月以降は2ヶ月間隔で継続投与しています。免疫細胞治療開始から7年経過後の2014年12月現在も無再発かつ良好な全身状態で経過しています。



考察

直腸がん切除後の両側肺転移に対して、肺転移切除後からアルファ・ベータT細胞療法を単独で行い、長期に亘り良好な全身状態を維持しながら継続治療できている一例です。また、経過観察しながら適宜、治療間隔を延ばすことが可能な治療法です。このことは患者さんの経済的負担軽減にも寄与されるものと思われます。

化学療法のように身体に負担をかけることなく長期に亘り継続治療できるという免疫細胞治療の特徴をよく表している一例であると考えます。

ここでご紹介している症例は、瀬田クリニック東京の症例データです。
スマートフォンからご覧頂けますので、こちらのQRコードよりご参照ください。

